

報告記事

第 71 回 通常 総 会

第 111 回 講 演 大 会

昭和 61 年 4 月 2 日第 71 回通常総会、名誉会員推挙式、表彰式、特別講演会が、また 4 月 2 日、3 日、4 日の 3 日間第 111 回講演大会がいずれも東京大学工学部、法学部で（東京都文京区本郷）で開催された。

第 71 回通常総会

第 71 回通常総会は石原会長が議長となり、木下本会専務理事司会のもと、4 月 2 日 9 時より東京大学法文一号館 25 番教室で開催された。冒頭に石原会長の挨拶が行われた。

本日ここに日本鉄鋼協会第 71 回通常総会を開くにあたり、諸先輩を初め会員各位多数のご参会をいただき、誠に喜ばしく心より御礼申し上げます。この機会にいささかの所信とお願いを含めて、ご挨拶を申し上げたいと存じます。

協会は昨年、創立 70 周年を迎え記念式典を挙げて鉄鋼技術の発展を祝いました。会員諸兄にはわが国鉄鋼業の 70 年の歴史の重みをそれぞれに噛みしめられ、技術・研究への一層の熱意をかきたてて、この一年を送られたことと思います。本日また、諸兄の元気な充実感あふれるお顔を拝見し、会長としてこの上ない喜びを感じるものであります。

既にご高承のごとく、鉄鋼業界の現状は一段と厳しさを増してきております。昭和 60 年度の粗鋼生産は一昨日をもつてほぼ 103000 千トン強に終わつたと思われませんが、これは前年度の 106000 千トン強に比べ約 3000 千トンの減少であります。しかもこれを前・後半に分けて見ますと、下期の落ち込みは極めて大きく上期に対して約 2400 千トン、比率にして 4.5% となつており、昨秋以来急激な市場の変化が見られるに至っております。世界的に景気が不透明感を強める中で、昨年の後半から対米輸出等が減少、さらにこれに急激な円高が加わって、国内需要も輸出関連産業を中心に減退をつづけております。このような経済環境の中で、本年度もまた鉄鋼生産の大きな回復は期待できないと懸念されている現状であります。

また、この急激な量的変化は転炉鋼をベースとする鉄鋼一貫メーカーに顕著であり、電炉鋼の生産はほぼ安定したさう勢下にはありますが、為替レートの急激な変化もあつて、経営的には両業界ともかつてない困難な情勢に直面している現状であります。

しかも、わが国鉄鋼業を取り巻く内外の情勢は、先進国を中心とする保護貿易主義の高まり、輸入鋼材の増加、さらには需要業界のニーズの急速な多様化・高度化などに見られるように、かつてとは構造的に様変りの様相を呈しております。

しかし、私共は過去幾たびか苦難の時代を経験しており、苦しければ苦しいほどなおいつそうの努力を傾注し技術的な力を湧出させてやつてきた経験があります。過

去 10 年間、それまでの高度成長の時代を受けついで、鉄鋼技術の質的向上に努力して参りましたその成果はこれからの経営に威力を発揮してくれる、と私は確信致します。すでに各社におかれては、現状をふまえこれからの新しい経営に並々ならぬ決意を蔵しておられる、と新聞は報じております。コスト競争力を更に確固たるものにするために、変動費はいうに及ばず固定費もいかにして削減してゆくか、すべては技術の力にかかつております。会員諸兄には、技術者であると研究者であるとを問わず、また直接的に関与されると間接的であるとを問わず、鉄鋼技術にたずさわものの一員として更に研さんに励み最大の努力を傾注して、技術の向上のため、そしてまた鉄鋼業の発展のために渾身の力を傾注していただきたいと思うものであります。

技術に関する画期的行事として、昨年は国際科学技術博覧会が 6 か月間にわたつて筑波研究学園都市で開催されました。科学万博はテーマとして「人間・居住・環境と科学技術」を掲げましたが、鉄鋼業界も積極的に参加して入場者に大きな関心と感銘を与えました。

人間・居住・環境、これらはいずれも鉄鋼を離れては論ぜられない対象であります。21 世紀は従前にも増して人間性・社会性との調和の要請される世紀でなければならず、科学技術の展開のあり方もこの観点から極めて重視されるところであります。21 世紀を創造する鉄鋼技術は果してどうなつておりましたどうなつていなければならないのか、関心を呼び英知の要請されるところであります。

明日の技術開発、21 世紀に向けての鉄鋼の技術開発に関連して特に期待されるのは、昨年、基盤技術研究促進センター及び金属系材料研究開発センターが相次いで誕生を見たことであります。特に金属系材料研究開発センターは、通産省当局の提唱により、鉄鋼、非鉄、需要業界ならびに銀行も含めて計 52 社の Top Management の熱意により創られたものであります。鉄鋼業界が共同で研究開発を行つてきた例は従来もなかつたわけではありませんが、このセンターは共同研究の仕方も漸新であり、特に異なつた業界の広い範囲の技術者の方々の横断的な協力によつて材料の開発が進められることは、従来になかつた画期的なことであり、成功を願つて止みません。また、基盤技術研究促進センターによる資金面からのサポートは、金属系材料研究開発センターでの共同研究を含めて、私どもの鉄鋼技術全体の共同研究に、新しい道を開くこととなりましょう。新しい金属材料がどういう姿になるのか、鉄鋼はどのような形が期待されるのか、また例えば新しい精錬技術はどう進むのか、諸兄の中には今後この共同研究開発に携わる方が多数出てこられると思いますが、この席を借りて諸兄の健闘をお願いすると共に、21 世紀に向けての鉄鋼技術の飛躍を期待するものであります。

ここで協会の活動に些か目を転じてみたいと思ひます。昨年度の事業につきましては後刻企画委員長より詳しく報告があると思いますが、私は、協会の活動は順調にすすめられこの一年大きな足跡を残した、と考えております。

二、三例をあげますと、昨年度より始めました講演大会における萌芽・境界技術に関するセッションでは 150 件に近い論文発表が行われました。いずれも鉄に繋がるあるいは鉄に近い分野の技術を対象としており、この成功は、それ自体はもちろん、いずれ鉄そのものの技術の進展にも大きな貢献をなすものと期待されます。また「鉄鋼基礎共同研究会」、「特定基礎研究会」も基礎データの整理・蓄積など大きな成果をあげ、技術者・研究者の座右の書として今後の活用が期待されるところであります。

また、講演大会、支部大会、共同研究会あるいは各技術講座も極めて活況の内に終始し、会員諸兄の研さんと対話の促進に大きな貢献を致しました。その他の活動も逐一言及の要はないかと思えます。本席を借りまして、実際にお世話いただきました役員・委員の方々のご多忙を押してのお骨折りに衷心より厚くお礼申し上げたいと存じます。

さて、私は 2 年前の会長就任にあたり次の二つの件について検討していただくよう企画委員長にお願い致しました。

一つは国際交流のあり方についてであります。会議形式による国際交流は二国間ではなくもつと各国技術者にオープンにした方がよいのではないかと、また国際会議をもつと日本で開催し日本の技術・研究の実際の姿を更には日本の風土・文化を直接目で見えて貰う機会を多くした方がよいのではないかと、考えたわけであります。

本件につきましては、堀川一男会員を委員長とする国際交流事業検討委員会が設けられて幅広く前向きな検討が行われ、今後の路線の考え方も整理されて、昨年秋正式に国際交流委員会の誕生を見るに至りました。従来の二国間 Symposium は実際に大きな交流の実を挙げているものは一、二引きつづき存続するとして、その他の Symposium は終息の方向にもつてゆく、昨年の日本・スウェーデン、あるいは日本・カナダ Symposium のように相手国からの申込みによる随時の Symposium は受けることもあり得るが、現行のように協定による定期的なものは原則として終息させる、と共に Conference, Symposium, Seminar のいかに問わず、日本鉄鋼協会主催の国際会議を、各国の技術者が自由に参加できる国際会議を今後増やしてゆく、ということで新しい路線が整理されました。

実りある国際会議を我が国でもつと数多く開催するという事は、企画・立案・調整・推進など大きな苦勞を伴うものであり、また各国学協会との調整も決して易々たる道ではないと思われませんが、これからの日本鉄鋼業のおかれるであろう国際的立場を考慮し、長期計画のもとに着実に進めていっていただきたいと考えます。また日本での開催となれば参加できる会員数もはるかに多くなり、若手会員もふくめて積極的に参画し、すべてが国際人となるよう努力をお願いしたいと思っております。

もう一つは産学連携についてであります。技術開発のためには、特に画期的な技術を開発してゆくには、どうしても基礎的な研究が必要であり、この意味において産学の連携を強化することの重要性は従前よりも常に叫ばれ

ており、いろいろな機関による政府への答申におきましても声を大にして強調されつづけてきたところであります。

もちろん協会としてかねてより両者の連携に意を用いてきていることはご高承のとおりであります。調査研究小委員会の活動もそうですし、講演大会もいくつかの委員会の活動もそうですといえます。二つの基礎共研はまさにこれに該当致します。しかし、将来の鉄鋼技術を考えて場合、今のやり方だけで十分なのか、協会こそこれに基本的に貢献できる立場にもあるわけで十分検討してみたい、というわけであります。特に我々の技術がかなりその成熟度を高めてきている現段階で、先を見つめて果してこのままで良いのか、また大学側の頭脳がそのもてる力を十分に発揮できる環境にあるのか、もし何らかの手だてが望ましいとすれば、協会として実際に何ができるのか、討議・検討をしてみる必要があるというわけであります。

これに関しましては、伊藤慶典会員に主査をお願いして特別 WG で凡ゆる角度から検討をしていただきました。そしてその結果、新しい方向として次の二つに力点を置くことに致しました。

第一は、産学連携強化のためには両者間の情報交換を更に深めてゆくことが必要であり、将来の方向付けを含めた技術進歩に対する意見交換など、調査研究小委員会の活動を逐次強めてゆく、という点にあります。本小委員会は昨年、鋼の精錬・凝固を対称として「製鋼の将来技術」を上梓致しましたが、この内容は極めて意義あるものであります。今後この種の活動を凡ゆる分野に拡げ、かつその内容については講演大会など適宜な機会に多数会員による総合的な討議を行うことにしたいと思えます。

第二点としては、将来の技術を指向した研究のテーマについて、産学両者よりそれぞれ公開し合い相互の啓蒙に資することによつて研究の実を更にあげよう、協会としてその労をとることと致しました。私は、これによつて両者間の個々の契約による研究が現在よりもはるかに数多く実施されることになろう、と期待しているものであります。しかし一方、公開による相互の啓蒙という観点から見ますと、将来について何を考え、いかにあるべきだと思っているかについて、特に企業側からこれがテーマの形で示されることが必要であります。企業のあり方として、秘密を守るという立場から公開しにくいということもあるかと思いますが、一般論として特にかなり先の技術については、先ほどのセンター誕生の趣旨にもありますように、このことにこだわる時代ではもはやないのではないかと考えられますし、できるだけ公開に応じていただき、この制度を実りあるものにしていただきたいと考えます。この仕事は協会としても初の試みであり、研究委員会において具体的やり方など十分に検討し実行に移してほしいと思えます。

いずれに致しましても、これからの研究のあり方の方向は、特に基礎研究のそれは、ずつと先の鉄鋼技術の姿に大きく関わつてくるといえましよう。産学連携は協会としても、これのみでなく他の考え方も含めて、常に息ながく関心を持ちつづけるべき主題である、と考えるし

だいであります。

次に、私の在任 2 年の印象としてもう一つ付言させていただきます。それは、この席での挨拶としては誠に不似合かと存じますが、協会本部における事務の効率化であります。

官・公・私のいかに問わず、それぞれの Division において、また他 Division との連がりも含めて、効率的システムの存り方が常に見直され実際にまた業務自体も効率的に運営されていることは、生存のための必須の条件であります。日本経済が、特に石油危機以降の経済がここまでの成長をとげた理由として、技術の恩恵の大きさはもちろんですが、同時に、たえざる努力によつてそれぞれの業務が効率的に運営されてきたことが挙げられると思います。効率化は活性化に繋がります。鉄鋼協会としても、やり方によつてはまだまだ事務効率をあげうるのではないかと考えます。実はこの 2 年間、木下専務理事の方でもこれについていろいろ検討されたわけですが、これはなかなか難しい問題であり、今のところ大きな変革を見るに至っておりません。しかし、これは協会の発展のためにも極めて重要なことであります。今後とも関係の方々には常にこのことを考えていついていただきたいと思うのであります。

前にもふれましたように、また皆さんもそう考えておられると思いますが、私は協会の活動はよく機能していると考えます。協会は会員のためのものであり、会員が自らの積極的参画を通じて協会の活動をさらに盛り上げることによつて、また協会の活動が深く討議されたすぐれた企画によつていつそう盛り上がることによつて、会員自身が新しく研さんに励み新しい力を作り出してゆく、というふうに理解致しておりますが、このためには会員各位には、協会の活動にいつそうの関心と協力をよせていただきたいと思ひます。なかんずく、役員の方々、各委員会委員の方々には、ご多忙のところ誠に申しわけなく存じますが、今後とも特段のご協力をお願い申し上げます。そしてこの協会をもつと素晴らしいもつと身近なものにしていついていただきたい、一言で言えば、われわれの協会、みんなの協会、にしていついていただきたいと存じます。

最後に、鉄鋼技術の発展のために技術・研究に日夜精励しておられる会員各位のいつそうのご健勝と協会のさらに実りある活動を祈念致しまして、私の挨拶を終わりたいと思ひます。

なお、私は本総会をもつて会長を退任致します。この 2 年間会員各位より寄せられましたご厚情に対し衷心より厚く御礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

以上挨拶が行われた後、総会の議事に入つた。付議された案件は次のとおりである。

- 議案第 1 号 昭和 60 年度事業報告、収支決算ならびに財産目録の件
- 議案第 2 号 昭和 61 年度事業計画ならびに収支予算の件
- 議案第 3 号 理事、監事ならびに評議員選挙の件

初めに議事進行上、議案第 3 号から始められた。選挙管理委員に川井俊彦君(住友金属)、西田禮次郎君(神戸製鋼所)を選び投票が行われ、別室において開票に入つた。続いて議案第 1 号ならびに第 2 号が関連しているので一括議題として付され、これを事業と会計に分け、事業については栗田満信理事、会計については岡雄彦理事からそれぞれ報告ならびに提案がなされた。

[昭和 60 年度事業ならびに昭和 61 年度事業計画]

本会は昭和 60 年 2 月 6 日創立 70 周年を迎え、当日物故会員追悼会を開催したのを始め、3 月 31 日には記念式典、特別表彰、特別講演会、記念祝賀パーティを開催致しました。さらに、創立 70 周年記念事業としましては、会誌「鉄と鋼」、「トランス・アイ・エス・アイ・ジェイ」の特集号として、「わが国における最近十年間の鉄鋼技術の進歩」を刊行しましたほか、本会の 20 年間のあゆみを中心とした「日本鉄鋼協会史」を刊行致しました。また、理工系大学生の研究所、製鉄所の見学会を 11 月に実施致しましたところ好評でありましたので昭和 61 年度も引き続き実施する予定であります。

次に一般事業でございますが、まず当協会の主要事業であります春秋の講演大会と刊行事業について申し上げます。

講演大会は春は東京、秋は新潟において開催し発表件数は討論会を含め 1722 件で毎年増加するとともに活発な討論がなされております。また、鉄鋼がいずれ新しい材料あるいは先端技術とかかわりを持つことを考え講演大会や会誌へ新しい分野として「萌芽・境界技術部門」を設けましたが春秋の大会においてチタン・複合材料等 149 件の講演がありました。なお、昭和 61 年度春季大会は、本日午後から開会されますと共に秋の大会は名古屋において開催することを決定しております。

次に会誌に関してでございますが、昭和 60 年度の和文会誌「鉄と鋼」は今年も多数の研究論文を掲載するとともに技術資料、解説等、会員の意向を反映した啓蒙記事の充実を図りました。発行冊数は、講演概要集を春秋各二冊計四冊とし、普通号十一冊及び創立 70 周年記念特集号一冊計 16 冊を発行致しました。又、欧文誌「トランス・アイ・エス・アイ・ジェイ」は、国内外の優れた研究論文のほか、春秋の講演大会の概要、わが国で開発された鉄鋼設備、製品等を 12 冊に分け掲載するなどいつそうの充実に努めました。この結果、外国会員をはじめ海外の読者も増加致しております。

昭和 61 年度の「鉄と鋼」は、「チタン及びチタン合金」と「表面処理」の 2 冊の特集号を含め 16 冊発行致します。「トランス・アイ・エス・アイ・ジェイ」は特集号としては、「溶接技術」を取り上げますほか普通号併せて 12 冊の発行を予定しております。

昭和 60 年度のその他図書の刊行としましては、鋼材マニュアルシリーズ四、条鋼マニュアル「形鋼編」を改訂発行致しました他、鉄鋼便覧の英文出版の準備及び高炉内反応に関する図書の出版をすべく海外出版社と出版契約を完了致しました。海外出版社とのこのような契約は初めてであり、今後の出版のあり方の一つとして期待いたしております。昭和 61 年度は条鋼マニュアル「棒鋼編」、並びに厚板マニュアルを始め設備診断、ホットス

トリップ分科会報告書等の発行を計画致しております。

次に昭和 60 年度の技術講座関係と致しましては、西山記念技術講座は、「マイクロロイニング技術の最近の動向」他 3 テーマにより東京、大阪、広島で計 8 回開催され、白石記念講座は、「新しいセンシング技術」と「ファインセラミックスの開発と応用」のタイトルを取り上げいずれも好評を得ております。昭和 61 年度も西山技術講座は「鋼管製造技術」他 2 テーマ、白石記念講座は「電子材料の製造技術」ほか 1 テーマを予定しております。

次に調査研究事業について申し上げます。

共同研究会は鉄鋼技術全般にわたり現場の立場からの研究と情報交流を 18 部会の構成により行っておりますが、新部会として「亜鉛めつき鋼板部会」が発足致しました。この部会は溶融亜鉛めつき鋼板を対象に製造操業関係の技術交流を進める為、昭和 60 年 9 月に発足しました。

特定基礎研究会は鉄鋼業界からの要望課題について基礎的な研究を行っておりますが、新たに「電磁気冶金の基礎研究」、「画像解析による材料評価」、「相界面・結晶粒界の設計と制御」の 3 部会が発足致しました。

鉄鋼基礎共同研究会は従来の「鉄鋼の環境強度」、「鉄鋼の急速凝固」、「高純度鋼」の 3 部会に加え、昭和 61 年度より「鉄鋼の結晶粒超微細化」、「界面移動現象」の 2 部会が発足する予定であります。

標準化委員会は JIS 原案の作成、鋼材特性に関する各種データシートの作成、ISO 規格の日本側意見のとりまとめ等幅広い活動を行っております。本年 9 月には機械試験に関する ISO/TC 164 の国際会議を東京で開催する予定でございます。又、鉄鋼標準試料委員会は化学分析用、機器分析用等標準試料を製造頒布し国内外の鉄鋼分析技術の向上に努めております。

次に国際交流関係でございますが、昨年 9 月第 3 回鉄鋼延延国際会議（鋼管）を東京で開催致しました。講演数は日本 40 件、海外 47 件の計 87 件で 31 セッションに分かれ講演と討論が行われました。さらに第 3 回日中鉄鋼学術会議、日本スウェーデン鉄鋼技術会議、第 10 回日ソ製鋼物理化学シンポジウム、日本カナダ鉄鋼技術会議を開催し活発な活動を行いました。

又、先ほど石原会長のご挨拶の中にもありましたように、将来的には二国間シンポジウムより国際会議に重点を移す方向にありますが、昭和 61 年度は過去の経緯から第 5 回チェコスロバキア合同シンポジウムとプロセス冶金をテーマに第 4 回日本ノルディック諸国とのシンポジウムを予定致しております。又、2 年後には「加工熱処理の物性冶金に関する国際会議」などを計画しております。

次に鉄鋼技術情報活動でございますが、従来通り金属関係文献を抄録し検索システムへの入力作業を行うとともに端末機によるシステムの利用と普及に努めております。ISO/TC 17 幹事国業務につきましては昨年 10 月 TC 17 総会をデュッセルドルフで開催致し、ほぼ ISO 事務局の希望した通りの成果を挙げることができました。

[昭和 60 年度会計報告および昭和 61 年度収支予算]
(決算)

一般会計決算の結果、収入は 990 977 060 円となりました。これは予算に対し 5.8% の増収であります。本年度は会費収入で 1% 増収、刊行事業収入をはじめ講演大会研修事業、情報事業、鉄鋼標準試料等では 16.6% の増収となりました。

一方、支出の部におきましての決算の結果は、予算に対し 0.4% 減となり支出総額は、9 億 3 227 万 2 591 円となりました。これを事業別にスライドに示しましたのでご覧下さい。

この結果当期剰余金 5 870 万 4 469 円をもつて昭和 60 年度を終了いたしました。

(剰余金処分)

次に剰余金につきましては、その全額すなわち 5 870 万 4 469 円を次年度に繰越し、昭和 61 年度財政を充実いたしたく提案します。

(財政目録)

なお、決算の結果、昭和 60 年度末現在の一般会計保有の純財産は、3 億 2 969 万 5 107 円でございます。

(別途資金会計)

別途資金会計は表彰ならびに事業資金ほか 17 の会計を保有しており、それぞれの目的に応じた事業を行い特別資金運営委員会、理事会の議を経て支出し、または蓄積されております。

(補助金事業等会計)

補助金事業会計は 11 の特別会計を有し、補助金、委託金あるいは他団体の分担金等により運営しております。ISO 幹事国業務会計、高級ラインパイプ研究会計をはじめ、いずれも充実した事業を行っております。

(一般会計)

一般会計でございますが、昭和 61 年度も大変厳しい予算編成方針のもとに編成いたしました。収入の部では、前期繰越金を含め総額 9 億 4 093 万 2 469 円を計上いたしました。これは前年度に対し 0.5% の増でございます。

一方、支出の部におきましては、刊行事業費では、和文会誌を本年度も 16 冊、欧文会誌 12 冊、特別報告書などの発行費を計上いたしました。

また、調査研究事業費につきましては、事業報告にもありましたように、新部会の新設はありますが、そのほかは、おおむね継続事業でございまして、内容の充実に重点をおき、極力節約を図りました。

(別途資金会計)

別途資金会計の予算は例年通り特別資金運営委員会および理事会の議を経て事業計画をもとに編成いたしました。

昨年創立 70 周年記念事業の一つとして、実施いたしました理工系学生の研究所、製鉄所見学会を本年度も予算化しております。

(補助金事業等会計)

補助金事業等の会計は二つの特別会計が追加されましたが、そのほかは大方継続事業でございまして、ISO 幹事国業務会計ならびに高級ラインパイプ研究会計等を予算化いたしております。

以上議案説明の後、水野実監事より監査報告がなされ、満場一致をもつて議案第 1、2 号が承認された。引



通常総会で挨拶される久松新会長

続き先に行われた選挙の開票が終わり選挙管理委員より候補はいずれも絶対多数で当選された旨報告された。ここで会長、副会長、専務理事、常務理事を互選するため臨時理事会が開催され、会長に久松敬弘君(新任)、副会長に白松爾郎君(留任)、森一美君(新任)、専務理事に木下亨君(留任)、常務理事に三井太信君(再任)が互選され、久松新会長の就任挨拶(鉄と鋼、7号(5月号)掲載)の後、通常総会が終了した。

名誉会員推挙式 新名誉会員に次の三氏が推挙された。

小田助男君 住友金属工業(株)相談役
橋口隆吉君 東京大学名誉教授、東京理科大学教授
John Olof EDSTRÖM 君 スウェーデン王立工科大学
鉱山鉄鋼学科教授

表彰式 続いて表彰式に移り、下記の通り各賞が授与された。

渡辺義介賞 加藤 健君
西山賞 大谷 正康君
服部賞 古茂田敬一君 土手 彬君
香村賞 田中 孝秀君 前田 正恭君
渡辺三郎賞 荒川 武二君 平田 宏君
野呂賞 加藤 榮一君 三佐尾武雄君
宮川 大海君

依論文賞

津山 青史君	升田 貞和君	田川 寿俊君
平沢 猛志君	鈴木 治雄君	近藤 義宏君
松尾 孝君	田中 良平君	山口 弘二君
鈴木 直之君	井島 清君	金沢 健二君
山田 健三君	岩崎 克博君	伊藤 春男君
中谷 源治君	大槻 満君	才野 光男君
高橋 博保君	田中 邦宏君	二上 伸宏君
中村 勝君		

渡辺義介記念賞

荒木 茂昭君	緒方 公明君	梶井 貞夫君
加藤 直君	合田 照夫君	鈴木 充君
高井 岩男君	高石 昭吾君	田中 功君
田村 節夫君	藤堂 保和君	平井 信恒君
望月 達也君	山田 孝雄君	渡辺 泰男君

西山記念賞

入江 敏夫君	大坪 孝至君	乙黒 靖男君
川上平次郎君	木下 修司君	田中 千秋君
谷村 昌幸君	長 隆郎君	中岡 一秀君
広瀬 祐輔君	藤倉 正国君	深川 宗光君
榎本 弘毅君	美坂 佳助君	山口 正治君

特別講演会 表彰式につづいて次の特別講演が行われた。

1. 湯川メモリアルレクチャー
"Optimized Steelmaking from High Phosphorous Ores" J. O. EDSTRÖM 君
2. 受賞記念講演
「鉄鋼と攪拌」 渡辺義介賞受賞 加藤 健君
「金属工学における今後の課題」
西山賞受賞 大谷 正康君

講演大会

講演大会は4月2日、3日、4日の3日間東京大学工学部ならび法学部で開催された。

講演大会 講演数は製鉄関係 110 件、製鉄・製鋼共通 16 件、製鋼関係 175 件、加工・システム・利用技術関係 104 件、分析・表面処理関係 55 件、材料関係 233 件、萌芽・境界技術関係 92 件、計 785 件の研究が 18 会場にわかれ発表され、活発な討論がなされた。

討論会 今大会では 785 件の一般講演の他、次の 5 テーマによる討論会が行われた。

1. 検出端情報に基づく高炉内の解明
座長 大森康男、副座長 稲葉晋一
2. 合金溶鋼の脱りん
座長 佐野信雄、副座長 長谷川守弘
3. 圧延における計測制御 座長 北尾斉治
4. 油井管における最近の進歩 座長 細井祐三
5. 鉄鋼における表面分析の現状と問題点
座長 広川吉之助、副座長 大坪孝至

懇親会 懇親会は4月2日午後6時より千代田区一ツ橋の如水会館で日本金属学会と合同で開催された。増子昇東京大学教授司会のもと久松新会長、大谷日本金属学会会長の挨拶の後、高林仁一氏(京都大学名誉教授、新日鉄顧問)の乾杯で始まり、参加者の間で歓談がくりひろげられた。参加者は 370 名であった。

ジュニアパーティー 4月3日午後5時40分より東京大学第二食堂で開催され、若手技術者、研究者を中心に懇談がなされ親交を深めた。参加者は 160 名であった。